# たどり着いたのは世界遺産のアニ遺跡

カルスに1時間30分も遅れての到着と聞けば、少なからず憤りしたが、時計盤を先に回せば、カルスからアンカラへと戻る道路のドーウ・エキスプレスは、1時間以上遅れてアンカラに到着した。時差表は実際に存在するものだが、通常でも2時30分と遅れだし、まして1時間半以上の大幅な遅れになるとよった。

これが、トルコタイムか？と思いきや、アンカラ・イスタンブルを結ぶ高速列車YHTは、ほとんど遅れなかったわけに、遅延はドーウ・エキスプレスだけの特別なのかも知れない。ともあれ、この列車に乗客の皆は、時間に余裕を持つことが何より大切だと感じた。それは我々は、乗客同様、張り心地、食事内容、室内装、寝台サイトレの清潔さ、クルーのホスピタリティなど全てが快適だった。

さて、カルスはトルコ東部の都市で標高1750mの高原に位置する。冬期間にはオスマン帝国とロシアとの間で激しい争奪戦が繰り広げられ、しばしばロシア領となった。1921年以来トルコ領である。それゆえ、ロシア時代の建物も町のあちこちに残り、他のトルコの都市とは雰囲気が異なるものもカルスの特徴である。

街を散策する「ドーウ・エキスプレス」でカルスに到着したわけだが、「私はカルスのさらに東へ行けるところまで行きたくなった。

そこでタクシーをチャーターして、カルスの東方約40kmに位置する世界遺産「アニ遺跡」へ足を延ばした。アニは西暦971年にアルメニアの王、アショト3世が、バグダンからアニに遷都したことで発展した町であった。最盛期には人口10万人を数え、1001もの教会があることから「1001の教会の町」とも呼ばれていた。しかし、1319年の大地震で崩壊し、今では廃墟と化してしまった。

城壁をくぐり抜け、アニ遺跡の廃墟に立つとなぜかアガサ・クリスティの小説の世界に迷い込んだような気分になった。

古代のマローワン朝時代の古学者で、遺跡の発掘に従事、オリエント史（中東の地を訪れたそうだ。だとしたら、アニ遺跡にも来たのではアと、思ったから先だ、無人の廃墟で、ガサガサっと、音がしたまるか？と振り返ってみれば、かわいいウサギがいた。

最後に、今回の旅で覚えたトルコ語が「テシェッキュレル！」。意味は「ありがとう！」なので、トルコの皆さん、「テシェッキュレル！」

カルス市街を一望する台の上に建つカルス城。カルシュク朝時代（1015～1064）の建物である

「ドーウ・エキスプレス」の終着駅カルス。首都アンカラから1030km、イスタンブールからは1934kmもの距離に位置する

上／美味しいチュルクゥル焼で食べる前は写真撮影しまくりのファミリー。下／ボーアツ・ハットゥーシャを作るチュムランさんとトルコには沢山のケーブがある。写真の人物はアクシュルの前代表副理

## Kars

（カルス）

アニのディクラン・ホネンツ聖プレゴリオ教会。この教会を含む周辺の遺跡が2016年に「アニの考古遺跡」として世界遺産に登録された